

## 世帯形態からみた地域在住高齢者の支援 —単独世帯に焦点をあてて—

赤嶺伊都子 新城 正紀

Support for elderly people living in a community:  
Focus on elderly people living alone

Itsuko AKAMINE and Masaki SHINJO

We conducted a questionnaire survey targeting support for elderly people living in a community. We focused on elderly people living alone. The survey was conducted in 2000 in A-village of Okinawa prefecture. Of 911 people aged 65 years and over who received the questionnaire, 707 (87.4%) responded. The survey items were self-related health levels, how often they left their houses, how often they had conversations with neighbors, the Philadelphia Geriatric Center (PGC) Moral Scale, activities of daily living (ADL) and the Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology (TMIG) Index of Competence.

Among the respondents, elderly people living alone had fewer children than other elderly people. On the PGC Moral Scale there was a statistically significant low score for males living alone. They answered "I am afraid of a lot of things", "I often feel lonely" and "I don't see enough of my friends, relatives and families" more frequently than did other elderly people. There was also a statistically significant low score on Social Role, a subscale of the TMIG Index Competence, for males living alone.

The findings suggest the need to improve the current system and to provide social support for elderly males living alone.

**Key words :** elderly people living in a community, elderly people living alone, the Philadelphia Geriatric Center (PGC) Moral Scale, activities of daily living (ADL), the Tokyo Metropolitan Institute of Gerontology (TMIG) Index of Competence, social supports and social networks  
地域在住高齢者, 単独世帯, PGCモラルスケール, ADL, 老研式活動能力指標, ソーシャルサポート・ソーシャルネットワーク

### 1 はじめに

わが国の平均寿命(2001)は男性78.07,女性84.93と伸びており,世界で最も長寿国となってい

る。また,急激な高齢化の進行に伴い世帯形態が変化し,単独世帯の高齢者の割合は1975年から2000年にかけて5倍増加しており,今後も増加することが予測される(厚生統計協会,2001)。また

1998年国民生活基礎調査(厚生省, 2000)によると, 65歳以上人口の高齢者における単独世帯は13.2%で, その8割は女性であり, 夫婦のみの世帯32.3%, 親と未婚の子のみの世帯13.3%, 三世帯世帯29.2%, その他世帯11.9%となっている。

高齢者は加齢に伴い身体機能の低下などにより日常生活, 行動範囲が制限され, 配偶者・家族・友人などを失うことによる生きがい感の喪失, 不安感やさびしさを感じるなど, 身体的・心理的・社会的変化を伴う。単独世帯高齢者が地域で自立した主体的な生活を継続していくためには, 心身の機能の低下を予防し, 地域社会との積極的な関わりを持ちながら生活できる支援が望まれている。しかし現在のところ一人暮らし高齢者を対象とした支援体制が十分に整備されているとはいえない(本田ほか, 2002)。

これまで著者らは要介護認定者において, 年齢が高くなるにつれて配偶者がいない者が多く, 特に女性で一人暮らしをしている者の割合が高く, 普段身の回りの世話をしてくれる者については娘, 嫁, 配偶者, 息子の順に介護に大きく関わっていることを報告した(赤嶺ほか, 2000)。高齢者が単独世帯であるというだけで, 直ちに支援が必要な状態であるとは考えられないが, 単独世帯高齢者は日常生活に支障がでた場合に家族による支援を多く期待することができないことから, 公的なサポートがより必要と思われる。

家族, 地域社会のあり方が変貌する中で高齢者の生活様式, 健康に対する価値観やニーズが多様化している。現在, 我が国は21世紀の国民健康づくり運動として「健康日本21」を展開し, 全ての国民が健康で明るく元気に生活できる社会の実現を目指している。高齢者がより健康で健康寿命の延進を図り, 地域においていきいきと生活を続けていけるようにするためには, 心豊かな自己実現に向けた生きがいづくり, ヘルスプロモーションに視点をあてた対策が今後ますます重要になると推察される。単独世帯高齢者の増加は介護において今後の高齢者保健福祉政策を進める上で重要な問題となる。そこで本研究は, 地域在住高

齢者の単独世帯に焦点をあて, 単独世帯高齢者の身体的・心理的・社会的特性を明らかにすることにより, 今後増加が見込まれる単独世帯高齢者に対する行政・地域・家族における支援のあり方について検討し, 今後の高齢者保健・福祉・医療対策に資することを目的とした。

## II 研究方法

### 1. 対象地域

調査対象の沖縄県A村は沖縄本島西海岸のほぼ中央に位置し, 村域は南北27.4km, 東西4.2kmと南北に細長く, 総面積は50.70km<sup>2</sup>で, 15行政区から構成されている。産業別就業人口割合は, 第一次産業17.9%, 第二次産業15.8%, 第三次産業66.2%であり, 大型ホテルやゴルフ場などの施設が点在し, 県内有数のリゾート地となっており, A村高齢者の就業者数は総就業者の9.2%, 65歳以上人口の29.2%(沖縄県:5.3%, 19.3%)と高齢者は比較的に雇用の場に恵まれている。

A村の総人口は8,685人(1995年の国勢調査による)であり, 年少人口(0~14歳)1,627人(18.7%), 生産年齢人口(15~64歳)5,590人(64.4%), 老年人口(65歳以上)1,468人(16.9%)である。2000年の老年人口割合は, 18.5%であり老年人口割合が年々増加し, 沖縄県平均(11.7%; 1995年, 13.8%; 2000年)に比べて高く, 高齢化が進んでいる地域である(恩納村, 2000)。

### 2. 対象者および調査方法

本調査は, 2000年3月~5月にA村役場の協力を得て実施された。1999年10月現在の住民基本台帳によるとA村の65歳以上の人口は1,775人(男性708, 女性1,067)であった。村人口の51.3%に相当する7行政区の65歳以上の地域在住高齢者911人(男性371, 女性540)を対象として質問紙を用いた訪問面接法による調査を行った。ただし, 施設入所のため住所が施設に移された者は対象者から除外された。

アンケート調査を実施するにあたって, 調査実施者となった民生委員, ボランティア, 役場職員

に対して事前に説明会を開催した。調査実施についての対象者への周知は、事前に村役場から対象となった7行政区の区長に連絡するとともに、村広報誌などにより図られた。

調査は、著者らを含む調査実施者が対象者宅を訪問し、本人および家族に調査内容の説明を行い、同意・承諾を得た上で実施された。

対象者のうち死亡17人、入院・入所25人、転居7人、認知症等により調査不能17人、不在25人、調査拒否11人の合計102人を除外し、回答の得られた707人(有効回収率87.4%、707/809)を解析対象とした。

### 3. 調査項目

#### 1) 基本的属性

性、年齢、配偶者の有無、家族構成、子の数、子との時間的距離などである。

#### 2) 日常生活動作 (Activities of Daily Living: ADL)

ADL評価法として Barthel Index (Mahoney and Barthel, 1965; 正門ほか, 1989)を使用した。Barthel Index は食事、移乗、整容、トイレ動作、入浴、歩行、階段昇降、更衣、排便コントロール、排尿コントロールの10項目からなる重みづけ評定尺度である。各項目は自立度に応じて、0~5、0~10、または0~15の得点が与えられ、各項目の合計点をADL得点とした。全項目が自立なら100点、逆に全項目が介助を要するのであれば0点とした。

#### 3) 日常活動能力

日常活動能力指標として東京都老人総合研究所の古谷野ほか(1987)が開発した老研式活動能力指標を用いた。老研式活動能力指標は、Lawton(1972)の活動能力の体系を拠りどころとして、ADLの測度ではとらえられない高次の生活機能を評価するために開発された13項目の多次元尺度であり、地域在住高齢者の生活機能の測定に適している(古谷野ほか, 1987; 古谷野ほか, 1993)。老研式活動能力指標の13項目は「手段の自立」「知的能動性」「社会的役割」の3つの下位尺度からな

る。老研式活動能力指標はそれぞれの質問項目について「はい」に1点、「いいえ」に0点を与え、単純加算により合計得点が求められ、可能得点範囲は0~13点である。

#### 4) 主観的幸福感

主観的幸福感は、改訂版PGCモラルスケール(Lawton, 1975)を前田ほか(1979; 古谷野, 1981)を用いて測定した。改訂版PGCモラルスケールは17項目の設問からなり、「はい」、「いいえ」、もしくはそれに準じた二者択一的な回答を選択させ、主観的幸福感を向上させる方向で働く回答に1点、そうでない方の回答には0点を与え、これらを単純加算して数量化した。欠損値の取り扱いについては杉澤ほか(1993a; 1994)による欠損値の取り扱いに準じ、欠損値が半数すなわち8項目以下の対象者については、回答している項目への回答傾向に基づき、主観的幸福感(推定値) = 単純加算された点数  $\times$  (17/回答項目数) という方法で主観的幸福感(推定値)を求め解析した。

#### 5) その他

主観的健康感(現在の健康状態、1年前と比べた健康状態)、外出状況、隣近所との会話についてである。

### 4. 解析方法

単独世帯と単独世帯以外の世帯(以下、単独以外世帯)について2群の比較検討を行った。単独以外世帯は「夫婦のみの世帯」、「親と未婚の子のみの世帯」、「三世帯世帯」、「その他の世帯」を合わせた世帯とした。

調査データの集計は、単独世帯と単独以外世帯別、男女別、年齢区分(前期高齢者(65~74歳)、後期高齢者(75歳以上))別に分け、各調査項目についてクロス集計を行った。

単独世帯と単独以外世帯の2群間の統計学的有意差検定は、平均値の差の検定にはMann-WhitneyのU検定および年齢と世帯の交互作用をみるために共分散分析を用い、年齢を調整した有意差の検定を行った。また、比率の検定には $\chi^2$

検定を行い、 $\chi^2$  検定の有意確率は、Fisher の直接法を用いた。次に、Mantel-Haenszel 検定を用いて、年齢区分で層別化し、世帯との関連性の有意性は  $\chi^2_{Assoc}$ 、年齢区分の均一性（交互作用）は  $\chi^2_{Homog}$  により検討した。均一性が認められない事象を交互作用ありとした。

解析には、統計解析ソフト SPSS10.0J for Windows を用いた。

### III 結 果

#### 1. 分析対象者の基本的属性 (表 1)

解析対象者の世帯形態の構成割合は、単独世帯 73 人、単独以外世帯は 634 人であった。表 1 に性別、年齢区分別、世帯別の配偶者の有無、子の数、子との時間的距離の分布を示した。

男性は 289 人であり、その内訳をみると前期高齢者が 166 人、後期高齢者が 123 人であった。前期高齢者の単独世帯は 5 人、単独以外世帯は 161 人であり、後期高齢者のそれぞれは 8 人、115 人であった。

女性は 418 人であり、その内訳をみると前期高齢者が 213 人、後期高齢者が 205 人であった。前期高齢者の単独世帯は 15 人、単独以外世帯は 198 人であり、後期高齢者のそれぞれは 45 人、160 人であった。

配偶者有りについて単独以外世帯でみると、男性では前期高齢者は 95.0%、後期高齢者は 90.4% であり、女性では前期高齢者は 74.6%、後期高齢者は 45.9% であった。

子の数については、前期高齢者においては男女とも単独世帯で子の数が少なく、単独世帯と単独以外世帯で有意差がみられた (男性:  $P < 0.05$ , 女性:  $P < 0.01$ )。後期高齢者では、女性において単独世帯で子の数が少なく、単独世帯と単独以外世帯で有意差がみられた ( $P < 0.001$ )。

子との時間的距離 (対象者宅から子どもの住居までの時間的距離、複数回答) についてみると、単独以外世帯の前期高齢者、後期高齢者の男女とも子と同居している割合は 60.5% から 79.9% の範囲にあった。また、単独以外世帯は、親の近く

(車で 30 分以内の距離) に住んでいる子が多い傾向がみられた。

#### 2. 主観的健康感、外出状況、隣近所との会話の頻度 (表 2-1, 表 2-2)

男性については表 2-1 に示した。外出状況 (よく外出する/たまに外出する, めったに外出しない) については、各年齢区分における世帯間には有意な関係は認められなかったが、年齢区分による交互作用が認められ、前期高齢者では単独以外世帯に「よく外出する/たまに外出する」の割合が高く、逆に、後期高齢者では単独世帯に「よく外出する/たまに外出する」の割合が高かった [ $\chi^2_{Homog} = 5.53$  ( $P < 0.05$ ),  $\chi^2_{Assoc} = 0.31$  (n.s.)]。

主観的健康感の「現在の健康状態」, 「1 年前と比べた健康状態」および隣近所との会話については、各年齢区分において世帯間に有意差は認められず、年齢調整しても世帯間に有意差は認められなかった。さらに年齢区分における交互作用も認められなかった。

女性については表 2-2 に示した。主観的健康感の「現在の健康状態」, 「1 年前と比べた健康状態」, 外出状況および隣近所との会話の全ての項目において、各年齢区分の世帯間に有意差は認められず、年齢調整しても世帯間に有意差は認められなかった。さらに年齢区分における交互作用も認められなかった。

#### 3. 主観的幸福感, ADL, 日常活動能力の各指標得点 (表 3)

表 3 に、性別、年齢区分別、世帯別にみた主観的幸福感, ADL, 日常活動能力の各々の指標についての得点を示した。

主観的幸福感は、男性の前期高齢者・後期高齢者とも単独世帯の得点が有意に低く ( $P < 0.05$ ,  $P < 0.05$ )、年齢を調整しても単独世帯が有意に低かった ( $P < 0.01$ )。

ADL については、男女とも年齢区分における世帯間に有意差がみられず、年齢を調整しても有意差はみられなかった。

表1 対象者の基本的属性

	男性 (N = 289)				女性 (N = 418)			
	65-74 歳 (N = 166)		75 歳以上 (N = 123)		65-74 歳 (N = 213)		75 歳以上 (N = 205)	
	単独世帯 (N = 5)	単独以外世帯 (N = 161)	単独世帯 (N = 8)	単独以外世帯 (N = 115)	単独世帯 (N = 15)	単独以外世帯 (N = 198)	単独世帯 (N = 45)	単独以外世帯 (N = 160)
配偶者の有無								
有り	—	152 (95.0%)	—	104 (90.4%)	—	147 (74.6%)	—	73 (45.9%)
無し	5 (100.0%)	8 (5.0%)	8 (100.0%)	11 (9.6%)	15 (100.0%)	50 (25.4%)	45 (100.0%)	86 (54.1%)
子の数	平均子数 ± 標準偏差							
	1.6 ± 2.1	4.2 ± 1.9	5.3 ± 0.8	5.0 ± 1.8	2.6 ± 2.4	4.4 ± 2.0	3.1 ± 2.2	4.6 ± 2.0
	P < 0.05		n.s.		P < 0.01		P < 0.001	
子との時間的距離 (複数回答)								
同居している	—	107 (67.3%)	—	69 (60.5%)	—	133 (68.2%)	—	127 (79.9%)
歩いていける距離	0 (0.0%)	66 (41.5%)	3 (42.9%)	61 (53.5%)	5 (33.3%)	86 (44.1%)	17 (38.6%)	77 (48.4%)
車で30分以内の距離	1 (20.0%)	68 (42.8%)	4 (57.1%)	57 (50.0%)	0 (0.0%)	87 (44.6%)	14 (31.8%)	63 (39.6%)
車で30分以上の距離	2 (40.0%)	90 (56.6%)	6 (85.7%)	77 (67.5%)	6 (40.0%)	116 (59.5%)	32 (72.7%)	94 (59.1%)
他都道府県	1 (20.0%)	83 (52.2%)	7 (100.0%)	68 (59.6%)	8 (53.3%)	100 (51.3%)	20 (45.5%)	78 (49.1%)
国外	1 (20.0%)	2 (1.3%)	0 (0.0%)	7 (6.1%)	1 (6.7%)	7 (3.6%)	1 (2.3%)	17 (10.7%)
子はいない	2 (40.0%)	7 (4.4%)	0 (0.0%)	2 (1.8%)	3 (20.0%)	8 (4.1%)	4 (9.1%)	5 (3.1%)

※ 単独以外世帯：夫婦のみの世帯、親と未婚の子のみの世帯、三世帯世帯、その他の世帯を合わせた世帯

※ 無記入、不明は表中に計上していない

※ —：単独世帯には、配偶者および同居している者がいない

※ n.s.：not significant

※ 子との時間的距離（複数回答）の分母は応答者数

※ 世帯間の比較には Mann-Whitney の U 検定を用いた

表 2-1 主観的健康感（現在の健康状態，1年前と比べた健康状態），外出状況，隣近所との会話の頻度—男性—

	65-74 歳 (N = 166)			75 歳以上 (N = 123)			Mantel-Haenszel 法による検定
	単独世帯 (N = 5)	単独以外世帯 (N = 161)	$\chi^2$ P 値	単独世帯 (N = 8)	単独以外世帯 (N = 115)	$\chi^2$ P 値	
<b>現在の健康状態</b>							
最高に良い / とても良い / 良い	4 (80.0%)	123 (77.8%)	0.91	4 (50.0%)	80 (69.6%)	0.25	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.51$ (n.s.)
あまり良くない / 良くない	1 (20.0%)	35 (22.2%)	n.s.	4 (50.0%)	35 (30.4%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.30$ (n.s.)
<b>1年前と比べた健康状態</b>							
はるかに良い / やや良い / ほぼ同じ	4 (80.0%)	117 (73.1%)	0.12	3 (37.5%)	62 (53.9%)	0.81	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.62$ (n.s.)
良くない / はるかに悪い	1 (20.0%)	43 (26.9%)	n.s.	5 (62.5%)	35 (46.1%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.06$ (n.s.)
<b>外出状況</b>							
よく外出する / たまに外出する	4 (80.0%)	148 (93.1%)	1.22	8 (100.0%)	85 (75.2%)	2.58	$\chi^2_{\text{Homog}} = 5.53$ (P < 0.05)
めったに外出しない	1 (20.0%)	11 (6.9%)	n.s.	0 (0.0%)	28 (24.8%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.31$ (n.s.)
<b>隣近所との会話の頻度</b>							
よく話をする / たまに話をする	5 (100.0%)	154 (96.9%)	0.16	7 (87.5%)	98 (86.7%)	0.004	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.15$ (n.s.)
めったに話をしない	0 (0.0%)	5 (3.1%)	n.s.	1 (12.5%)	15 (13.3%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.08$ (n.s.)

※ 単独以外世帯：夫婦のみの世帯，親と未婚の子のみの世帯，三世帯世帯，その他の世帯を合わせた世帯

※ 無記入，不明は表中に計上していない

※ n.s. : not significant

表 2-2 主観的健康感（現在の健康状態，1年前と比べた健康状態），外出状況，隣近所との会話の頻度—女性—

	65-74 歳 (N = 213)			75 歳以上 (N = 205)			Mantel-Haenszel 法による検定
	単独世帯 (N = 15)	単独以外世帯 (N = 198)	$\chi^2$ P 値	単独世帯 (N = 45)	単独以外世帯 (N = 160)	$\chi^2$ P 値	
<b>現在の健康状態</b>							
最高に良い / とても良い / 良い	10 (71.4%)	134 (68.0%)	0.07	26 (57.8%)	109 (68.6%)	1.82	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.81$ (n.s.)
あまり良くない / 良くない	4 (28.6%)	63 (32.0%)	n.s.	19 (42.2%)	50 (31.4%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.75$ (n.s.)
<b>1年前と比べた健康状態</b>							
はるかに良い / やや良い / ほぼ同じ	10 (66.7%)	133 (67.2%)	0.002	25 (55.6%)	98 (61.6%)	0.54	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.12$ (n.s.)
良くない / はるかに悪い	5 (33.3%)	65 (32.8%)	n.s.	20 (44.4%)	61 (38.4%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.25$ (n.s.)
<b>外出状況</b>							
よく外出する / たまに外出する	13 (92.9%)	177 (90.8%)	0.07	34 (75.6%)	122 (78.2%)	0.14	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.14$ (n.s.)
めったに外出しない	1 (7.1%)	18 (9.2%)	n.s.	11 (24.4%)	34 (21.8%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.003$ (n.s.)
<b>隣近所との会話の頻度</b>							
よく話をする / たまに話をする	13 (92.9%)	188 (96.4%)	0.49	41 (91.1%)	144 (92.3%)	0.07	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.21$ (n.s.)
めったに話をしない	1 (7.1%)	7 (3.6%)	n.s.	4 (8.9%)	12 (7.7%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.05$ (n.s.)

※ 単独以外世帯：夫婦のみの世帯，親と未婚の子のみの世帯，三世帯世帯，その他の世帯を合わせた世帯

※ 無記入，不明は表中に計上していない

※ n.s. : not significant

表3 主観的幸福感, ADL, 日常活動能力各指標の得点

	男性 (N = 289)				共分散分析 F 値 P 値	女性 (N = 418)				共分散分析 F 値 P 値
	65-74 歳 (N = 166)		75 歳以上 (N = 123)			65-74 歳 (N = 213)		75 歳以上 (N = 205)		
	単独世帯 (N = 5)	単独以外世帯 (N = 161)	単独世帯 (N = 8)	単独以外世帯 (N = 115)		単独世帯 (N = 15)	単独以外世帯 (N = 198)	単独世帯 (N = 45)	単独以外世帯 (N = 160)	
主観的幸福感	8.7±3.1	11.8±3.7	6.3±5.1	10.7±3.9	11.42	11.7±3.6	10.7±4.0	9.7±3.5	10.0±3.9	0.37
	P < 0.05		P < 0.05		P < 0.01	n.s.		n.s.		n.s.
ADL	100.0±0.0	99.3±5.6	96.3±7.4	96.3±12.3	0.01	99.3±2.6	99.0±6.7	94.6±19.4	95.1±14.6	0.001
	n.s.		n.s.		n.s.	n.s.		n.s.		n.s.
日常活動能力	10.8±2.4	11.2±2.2	10.8±1.3	9.1±3.6	0.54	11.1±2.3	11.5±2.2	9.0±3.8	9.2±3.7	0.43
	n.s.		n.s.		n.s.	n.s.		n.s.		n.s.
(手段的自立)	5.0±0.0	4.6±0.9	4.6±1.1	3.6±1.8	3.46	4.9±0.5	4.7±0.9	3.9±1.8	3.7±1.8	0.79
	n.s.		n.s.		n.s.	n.s.		n.s.		n.s.
(知的能動性)	3.0±1.4	3.1±1.0	3.1±1.1	2.8±1.2	0.09	2.7±1.2	3.2±1.1	2.2±1.4	2.4±1.4	2.89
	n.s.		n.s.		n.s.	n.s.		n.s.		n.s.
(社会的役割)	2.8±1.1	3.5±0.9	3.0±1.1	2.8±1.3	0.60	3.5±1.1	3.7±0.7	3.0±1.3	3.2±1.3	0.83
	P < 0.05		n.s.		n.s.	n.s.		n.s.		n.s.

※ 単独以外世帯：夫婦のみの世帯，親と未婚の子のみの世帯，三世代世帯，その他の世帯を合わせた世帯

※ n.s. : not significant

※ 主観的幸福感は改訂版 PGC モラルスケールを，ADL は Barthel Index を，日常活動能力は老研式活動能力指標を用いた。

※ 年齢区分毎の世帯間の比較には Mann-Whitney の U 検定を用いた。

※ 年齢と世帯間の交互作用をみるために共分散分析を用い，年齢を調整した有意差の検定を行った。



日常生活能力は、日常生活能力指標合計得点、三つの下位尺度（手段的自立・知的能動性・社会的役割）についてもそれぞれの得点を示した。日常生活能力合計得点では、男女とも前期高齢者・後期高齢者とも単独世帯と単独以外世帯に有意差はみられず、年齢調整しても有意差は認められなかった。下位尺度の「社会的役割」において、男性の前期高齢者では単独世帯の得点が有意に低かった ( $P < 0.05$ )。

#### 4. PGC モラールスケール各項目の分布 (表 4-1, 表 4-2)

表 4-1 に男性の PGC モラールスケール各項目について年齢区分別、世帯別の分布を示した。

心理的動揺の「最近になって小さなことを気にするようになったと思いますか」の項目で、後期高齢者の単独世帯において「はい」と回答した者の比率が有意に高く ( $P < 0.05$ )、いずれの年齢区分でも単独世帯以外で「いいえ」と回答した者の比率が有意に高かった ( $\chi^2_{\text{Homog}} = 0.55$  (n.s.),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 4.14$  ( $P < 0.05$ ))。

心理的動揺の「不安に思うことがたくさんありますか」の項目で、後期高齢者の単独世帯において「はい」と回答した者の比率が有意に高く ( $P < 0.01$ )、いずれの年齢区分でも単独世帯以外で「いいえ」と回答した者の比率が有意に高かった ( $\chi^2_{\text{Homog}} = 0.15$  (n.s.),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 9.98$  ( $P < 0.01$ ))。

孤独感・不満足感の「さびしいと感じることがありますか」の項目で、前期高齢者、後期高齢者のいずれにおいても単独世帯の者は「時々感じる・感じる」と回答した者の比率が有意に高く ( $P < 0.05$ ,  $P < 0.01$ )、いずれの年齢区分でも「時々感じる・感じる」と回答した者の比率が単独世帯で高く、有意な差が認められた ( $\chi^2_{\text{Homog}} = 0.01$  (n.s.),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 12.33$  ( $P < 0.001$ ))。

孤独感・不満足感の「家族、親戚、友人との行き来に満足していますか」の項目で、後期高齢者において単独世帯の者は「もっと会いたい」と回答した者の比率が有意に高く ( $P < 0.01$ )、いずれの年齢区分でも「満足」と回答した者の比率が単独

以外世帯で高く、有意差が認められた ( $\chi^2_{\text{Homog}} = 1.36$  (n.s.),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 13.79$  ( $P < 0.01$ ))。

孤独感・不満足感の「悲しいことがたくさんあると感じますか」の項目で、後期高齢者において単独以外世帯の者は「いいえ」と回答した者の比率が有意に高かった ( $P < 0.05$ )、年齢調整による世帯間の比較では有意差は認められなかった。

孤独感・不満足感の「今の生活に満足していますか」の項目において、後期高齢者において単独以外世帯の者は「はい」と回答した者の比率が有意に高く ( $P < 0.01$ )、いずれの年齢区分でも「はい」と回答した者の比率が単独以外世帯で高く、有意差が認められた ( $\chi^2_{\text{Homog}} = 0.65$  (n.s.),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 8.75$  ( $P < 0.01$ ))。

表 4-2 に女性の PGC モラールスケール各項目について年齢区分別、世帯別の分布を示した。

心理的動揺の「心配事があるとすぐおろおろする方ですか」の項目で、各年齢区分における世帯間に有意差は認められなかったが、年齢調整による世帯間の比較では有意差が認められ、「いいえ」と回答した者の比率が単独世帯で高く、有意差が認められた ( $\chi^2_{\text{Homog}} = 0.24$  (n.s.),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 3.83$  ( $P < 0.05$ ))。

自分の老いについての態度「あなたは年をとって前よりも役だたなくなりましたか」の項目で、各年齢区分における世帯間に有意な関連は認められなかったが、前期高齢者の単独世帯では「思わない」の比率が高かったが、逆に、後期高齢者の単独世帯では「思う」の比率が高く、年齢区分による交互作用が認められた ( $\chi^2_{\text{Homog}} = 5.41$  ( $P < 0.05$ ),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.01$  (n.s.))。

自分の老いについての態度「若いときと比べて、今の方が幸せだと思いますか」の項目で、後期高齢者の単独以外世帯で「はい」と回答した者の比率が有意に高かった ( $P < 0.01$ )。また、前期高齢者では単独世帯に「はい」と回答した者の比率が高く、逆に後期高齢者では、単独以外世帯に「はい」と回答した者の比率が高いという年齢区分による交互作用も認められた ( $\chi^2_{\text{Homog}} = 6.16$  ( $P < 0.05$ ),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 3.09$  (n.s.))。

表4-1 PGC モラールスケール各項目の分布 -男性-

質問項目	回答肢	65-74 歳 (N=166)			75 歳以上 (N=123)			Mantel-Haenszel 法による検定
		単独世帯 (N=5)	単独以外 世帯 (N=161)	$\chi^2$ P 値	単独世帯 (N=8)	単独以外 世帯 (N=115)	$\chi^2$ P 値	
<b>心理的動揺</b>								
最近になって、小さなことを気にするようになったと思いませんか	はい	2 (40.0%)	38 (23.8%)	0.70	5 (62.5%)	27 (24.3%)	5.53	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.55$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 4.14$ (P<0.05)
	いいえ	3 (60.0%)	122 (76.3%)	n.s.	3 (37.5%)	84 (75.7%)	P < 0.05	
心配だったり、気になったりして、眠れないことがありますか	ある	2 (40.0%)	48 (30.4%)	0.21	5 (62.5%)	42 (37.8%)	1.90	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.24$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 1.15$ (n.s.)
	ない	3 (60.0%)	110 (69.6%)	n.s.	3 (37.5%)	69 (62.2%)	n.s.	
不安に思うことがたくさんあります	はい	3 (60.0%)	36 (22.5%)	3.78	6 (75.0%)	29 (26.4%)	8.46	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.15$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 9.98$ (P<0.01)
	いいえ	2 (40.0%)	124 (77.5%)	n.s.	2 (25.0%)	81 (73.6%)	P < 0.01	
前よりも腹を立てる回数が多くなったと思いませんか	はい	0 (0.0%)	27 (16.9%)	0.81	3 (37.5%)	24 (21.8%)	1.04	$\chi^2_{\text{Homog}} = 1.48$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.00$ (n.s.)
	いいえ	4 (100.0%)	133 (83.1%)	n.s.	5 (62.5%)	86 (78.2%)	n.s.	
物ごとをいつも深刻に考える方ですか	はい	3 (60.0%)	60 (37.7%)	1.02	5 (62.5%)	47 (42.7%)	1.18	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.01$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 1.40$ (n.s.)
	いいえ	2 (40.0%)	99 (62.3%)	n.s.	3 (37.5%)	63 (57.3%)	n.s.	
心配事があるとすぐおろおろする方ですか	はい	1 (20.0%)	51 (31.9%)	0.32	4 (50.0%)	36 (32.7%)	0.99	$\chi^2_{\text{Homog}} = 1.05$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.02$ (n.s.)
	いいえ	4 (80.0%)	109 (68.1%)	n.s.	4 (50.0%)	74 (67.3%)	n.s.	
<b>自分の老いについての態度</b>								
あなたは自分の人生を年をとるに従ってだんだん悪くなっていくと感じますか	そう思う	4 (80.0%)	77 (48.1%)	1.97	6 (75.0%)	74 (66.7%)	0.24	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.58$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.97$ (n.s.)
	そうは思わない	1 (20.0%)	83 (51.9%)	n.s.	2 (25.0%)	37 (33.3%)	n.s.	
あなたは去年と同じように元気だと思えますか	はい	3 (75.0%)	113 (71.1%)	0.03	3 (37.5%)	57 (50.9%)	0.54	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.29$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.05$ (n.s.)
	いいえ	1 (25.0%)	46 (28.9%)	n.s.	5 (62.5%)	55 (49.1%)	n.s.	
あなたは年をとって前よりも役立たなくなったと思いませんか	思う	4 (80.0%)	90 (56.6%)	1.09	8 (100.0%)	84 (75.7%)	2.52	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.84$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 2.39$ (n.s.)
	思わない	1 (20.0%)	69 (43.4%)	n.s.	0 (0.0%)	27 (24.3%)	n.s.	
年をとるということは、若い時に考えていたよりよいと思いますか	よい	0 (0.0%)	37 (23.3%)	1.50	2 (25.0%)	21 (19.3%)	0.16	$\chi^2_{\text{Homog}} = 1.76$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.02$ (n.s.)
	同じ・悪い	5 (100.0%)	122 (76.7%)	n.s.	6 (75.0%)	88 (80.7%)	n.s.	
若い時とくらべて今の方が幸せだと思いますか	はい	2 (40.0%)	102 (64.6%)	1.27	2 (25.0%)	65 (58.6%)	3.42	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.12$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 3.43$ (n.s.)
	いいえ	3 (60.0%)	56 (35.4%)	n.s.	6 (75.0%)	46 (41.4%)	n.s.	
<b>孤独感・不満足感</b>								
さびしいと感じることがありますか	ない	1 (20.0%)	119 (75.8%)	7.86	1 (12.5%)	68 (61.3%)	7.28	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.01$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 12.33$ (P<0.001)
	あまりない時々感じる・感じる	4 (80.0%)	38 (24.2%)	P<0.05	7 (87.5%)	43 (38.7%)	P < 0.01	
家族、親戚、友人との行き来に満足していますか	満足	4 (80.0%)	145 (91.2%)	0.73	3 (37.5%)	98 (88.3%)	14.99	$\chi^2_{\text{Homog}} = 1.36$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 13.79$ (P<0.01)
	もつと会いたい	1 (20.0%)	14 (8.8%)	n.s.	5 (62.5%)	13 (11.7%)	P < 0.01	
生きていても仕方がないと思ふことがありますか	ある	1 (20.0%)	11 (6.9%)	1.22	3 (37.5%)	14 (12.6%)	3.78	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.02$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 3.17$ (n.s.)
	あまりない・ない	4 (80.0%)	148 (93.1%)	n.s.	5 (62.5%)	97 (87.4%)	n.s.	
悲しいことがたくさんあると感じますか	はい	0 (0.0%)	17 (10.6%)	0.48	4 (50.0%)	16 (14.7%)	6.56	$\chi^2_{\text{Homog}} = 2.11$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 2.06$ (n.s.)
	いいえ	4 (100.0%)	143 (89.4%)	n.s.	4 (50.0%)	93 (85.3%)	P < 0.05	
生きることは大変さびしいと思いませんか	はい	4 (80.0%)	68 (43.3%)	2.64	4 (50.0%)	45 (41.3%)	0.23	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.99$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 1.22$ (n.s.)
	いいえ	1 (20.0%)	89 (56.7%)	n.s.	4 (50.0%)	64 (58.7%)	n.s.	
今の生活に満足していますか	はい	3 (60.0%)	134 (83.8%)	1.94	4 (50.0%)	100 (90.1%)	10.89	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.65$ (n.s.) $\chi^2_{\text{Assoc}} = 8.75$ (P<0.01)
	いいえ	2 (40.0%)	26 (16.3%)	n.s.	4 (50.0%)	11 (9.9%)	P < 0.01	

※ 単独以外世帯：夫婦のみの世帯、親と未婚の子のみの世帯、三世帯世帯、その他の世帯を合わせた世帯

※ 無記入、不明は表中に計上していない

※ n.s. : not significant

孤独感・不満足感の「さびしいと感じることがありますか」の項目で、後期高齢者の単独世帯において「時々感じる・感じる」と回答した者の比率が有意に高かったが(P<0.05)、年齢調整によ

る世帯間の比較では有意差は認められなかった。

表4-2 PGC モラルスケール各項目の分布 一女性一

質問項目	回答肢	65-74歳 (N = 213)			75歳以上 (N = 205)			Mantel-Haenszel 法による検定
		単独世帯 (N = 15)	単独以外世帯 (N = 198)	$\chi^2$ P値	単独世帯 (N = 45)	単独以外世帯 (N = 160)	$\chi^2$ P値	
<b>心理的動揺</b>								
最近になって、小さなことを気にするようになったと思いますか	はい	5 (33.3%)	74 (37.9%)	0.13	17 (38.6%)	48 (30.8%)	0.97	$\chi^2_{Homog} = 0.68$ (n.s.)
	いいえ	10 (66.7%)	121 (62.1%)	n.s.	27 (61.4%)	108 (69.2%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.22$ (n.s.)
心配だったり、気になったりして、眠れないことがありますか	ある	6 (40.0%)	106 (53.8%)	1.07	22 (51.2%)	88 (56.1%)	0.33	$\chi^2_{Homog} = 0.31$ (n.s.)
	ない	9 (60.0%)	91 (46.2%)	n.s.	21 (48.8%)	69 (43.9%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.80$ (n.s.)
不安に思うことがたくさんありますか	はい	4 (26.7%)	75 (37.9%)	0.75	15 (33.3%)	60 (38.2%)	0.36	$\chi^2_{Homog} = 0.19$ (n.s.)
	いいえ	11 (73.3%)	123 (62.1%)	n.s.	30 (66.7%)	97 (61.8%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.67$ (n.s.)
前よりも腹を立てる回数が多くなったと思いますか	はい	3 (20.0%)	46 (23.5%)	0.09	7 (15.6%)	20 (12.7%)	0.24	$\chi^2_{Homog} = 0.29$ (n.s.)
	いいえ	12 (80.0%)	150 (76.5%)	n.s.	38 (84.4%)	137 (87.3%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.00$ (n.s.)
物ごとをいつも深刻に考える方ですか	はい	6 (40.0%)	102 (52.3%)	0.85	17 (37.8%)	81 (51.6%)	2.67	$\chi^2_{Homog} = 0.01$ (n.s.)
	いいえ	9 (60.0%)	93 (47.7%)	n.s.	28 (62.2%)	76 (48.4%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 2.98$ (n.s.)
心配事があるとすぐおろおろする方ですか	はい	5 (33.3%)	105 (53.8%)	2.35	17 (37.8%)	79 (50.6%)	2.32	$\chi^2_{Homog} = 0.24$ (n.s.)
	いいえ	10 (66.7%)	90 (46.2%)	n.s.	28 (62.2%)	77 (49.4%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 3.83$ (P < 0.05)
<b>自分の老いについての態度</b>								
あなたは自分の人生は年をとるに従ってだんだん悪くなっていくと感じますか	そう思う	5 (33.3%)	94 (48.5%)	1.28	30 (66.7%)	104 (66.2%)	0.00	$\chi^2_{Homog} = 0.95$ (n.s.)
	そうは思わない	10 (66.7%)	100 (51.5%)	n.s.	15 (33.3%)	53 (33.8%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.19$ (n.s.)
あなたは去年と同じように元気だと思っていますか	はい	10 (66.7%)	132 (66.7%)	0.00	24 (53.3%)	81 (52.6%)	0.01	$\chi^2_{Homog} = 0.00$ (n.s.)
	いいえ	5 (33.3%)	66 (33.3%)	n.s.	21 (46.7%)	73 (47.4%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.01$ (n.s.)
あなたは年をとって前よりも役立たなくなりましたか	思う	4 (26.7%)	100 (51.0%)	3.31	38 (84.4%)	117 (74.1%)	2.10	$\chi^2_{Homog} = 5.41$ (P < 0.05)
	思わない	11 (73.3%)	96 (49.0%)	n.s.	7 (15.6%)	41 (25.9%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.01$ (n.s.)
年をとるということは、若い時に考えていたよりよいと思えますか	よい	3 (23.1%)	44 (22.7%)	0.00	9 (20.5%)	35 (22.7%)	0.10	$\chi^2_{Homog} = 0.04$ (n.s.)
	同じ・悪い	10 (76.9%)	150 (77.3%)	n.s.	35 (79.5%)	119 (77.3%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.01$ (n.s.)
若い時とくらべて今の方が幸せだと思いますか	はい	12 (80.0%)	129 (65.5%)	1.32	22 (48.9%)	112 (72.7%)	9.00	$\chi^2_{Homog} = 6.16$ (P < 0.05)
	いいえ	3 (20.0%)	68 (34.5%)	n.s.	23 (51.1%)	42 (27.3%)	P < 0.01	$\chi^2_{Assoc} = 3.09$ (n.s.)
<b>孤独感・不満足感</b>								
さびしいと感じることがありますか	ない・あまりない	9 (60.0%)	118 (61.1%)	0.01	13 (28.9%)	75 (48.7%)	5.54	$\chi^2_{Homog} = 1.50$ (n.s.)
	時々感じる・感じる	6 (40.0%)	75 (38.9%)	n.s.	32 (71.1%)	79 (51.3%)	P < 0.05	$\chi^2_{Assoc} = 3.60$ (n.s.)
家族、親戚、友人との行き来に満足していますか	満足	13 (86.7%)	174 (88.8%)	0.06	35 (77.8%)	124 (80.5%)	0.16	$\chi^2_{Homog} = 0.00$ (n.s.)
	もったいない	2 (13.3%)	22 (11.2%)	n.s.	10 (22.2%)	30 (19.5%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.09$ (n.s.)
生きていても仕方がない、と思うことがありますか	ある	1 (7.1%)	16 (8.2%)	0.02	7 (15.6%)	28 (17.7%)	0.12	$\chi^2_{Homog} = 0.00$ (n.s.)
	あまりない・ない	13 (92.9%)	178 (91.8%)	n.s.	38 (84.4%)	130 (82.3%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.03$ (n.s.)
悲しいことがたくさんあると感じますか	はい	4 (26.7%)	33 (16.9%)	0.91	7 (15.6%)	33 (21.0%)	0.66	$\chi^2_{Homog} = 1.58$ (n.s.)
	いいえ	11 (73.3%)	162 (83.1%)	n.s.	38 (84.4%)	124 (79.0%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.00$ (n.s.)
生きることは大変さびしいと思いますか	はい	9 (60.0%)	81 (40.9%)	2.08	18 (40.0%)	75 (48.1%)	0.92	$\chi^2_{Homog} = 3.00$ (n.s.)
	いいえ	6 (40.0%)	117 (59.1%)	n.s.	27 (60.0%)	81 (51.9%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.01$ (n.s.)
今の生活に満足していますか	はい	14 (93.3%)	169 (86.7%)	0.55	35 (77.8%)	137 (86.7%)	2.16	$\chi^2_{Homog} = 1.64$ (n.s.)
	いいえ	1 (6.7%)	26 (13.3%)	n.s.	10 (22.2%)	21 (13.3%)	n.s.	$\chi^2_{Assoc} = 0.47$ (n.s.)

※ 単独以外世帯：夫婦のみの世帯、親と未婚の子のみの世帯、三世帯世帯、その他の世帯を合わせた世帯

※ 無記入、不明は表中に計上していない

※ n.s. : not significant

5. 日常活動能力の各項目の分布 (表5-1, 表5-2)

表5-1に男性の日常活動能力の各項目の年齢区分別、世帯別の分布を示した。

社会的役割の「家族や友だちの相談にのることがありますか」の項目で、前期高齢者において単

独世帯の者は「いいえ」と回答した者の比率が有意に高く (P < 0.01)、年齢調整による世帯間の比較では、各年齢区分とも単独以外世帯で「はい」と回答した者の比率が高く、世帯間で有意差が認められた。 [ $\chi^2_{Homog} = 2.83$  (n.s.),  $\chi^2_{Assoc} = 6.95$  (P < 0.01)].

表 5-1 日常活動能力の分布 —男性—

		65-74 歳 (N = 166)			75 歳以上 (N = 123)			Mantel-Haenszel 法による検定
		単独世帯 (N = 5)	単独以外世帯 (N = 161)	$\chi^2$ P 値	単独世帯 (N = 8)	単独以外世帯 (N = 115)	$\chi^2$ P 値	
<b>手段的自立</b>								
バスや電車で使ってひとりで外出できますか	はい	5 (100.0%)	151 (94.4%)	0.30	7 (87.5%)	79 (69.3%)	1.19	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.10$ (n.s.)
	いいえ	0 (0.0%)	9 (5.6%)	n.s.	1 (12.5%)	35 (30.7%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.71$ (n.s.)
日用品の買い物ができますか	はい	5 (100.0%)	155 (96.3%)	0.19	7 (87.5%)	84 (73.0%)	0.81	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.08$ (n.s.)
	いいえ	0 (0.0%)	6 (3.7%)	n.s.	1 (12.5%)	31 (27.0%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.36$ (n.s.)
自分で食事の用意ができますか	はい	5 (100.0%)	133 (82.6%)	1.05	7 (87.5%)	68 (59.1%)	2.53	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.23$ (n.s.)
	いいえ	0 (0.0%)	28 (17.4%)	n.s.	1 (12.5%)	47 (40.9%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 2.45$ (n.s.)
請求書の支払いができますか	はい	5 (100.0%)	153 (95.0%)	0.26	8 (100.0%)	98 (86.0%)	1.29	$\chi^2_{\text{Homog}} = -$ (-)
	いいえ	0 (0.0%)	8 (5.0%)	n.s.	0 (0.0%)	16 (14.0%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.58$ (n.s.)
銀行預金・郵便貯金の出し入れが自分でできますか	はい	5 (100.0%)	146 (90.7%)	0.51	8 (100.0%)	81 (70.4%)	3.27	$\chi^2_{\text{Homog}} = -$ (-)
	いいえ	0 (0.0%)	15 (9.3%)	n.s.	0 (0.0%)	34 (29.6%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 2.45$ (n.s.)
<b>知的能動性</b>								
年金などの書類がかけますか	はい	4 (80.0%)	130 (81.3%)	0.01	6 (75.0%)	76 (66.7%)	0.24	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.12$ (n.s.)
	いいえ	1 (20.0%)	30 (18.8%)	n.s.	2 (25.0%)	38 (33.3%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.00$ (n.s.)
新聞を読んでいますか	はい	3 (60.0%)	136 (84.5%)	2.13	6 (75.0%)	90 (78.3%)	0.05	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.80$ (n.s.)
	いいえ	2 (40.0%)	25 (15.5%)	n.s.	2 (25.0%)	25 (21.7%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.44$ (n.s.)
本や雑誌を読んでいますか	はい	3 (60.0%)	97 (60.2%)	0.00	6 (75.0%)	63 (55.3%)	1.19	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.53$ (n.s.)
	いいえ	2 (40.0%)	64 (39.8%)	n.s.	2 (25.0%)	51 (44.7%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.31$ (n.s.)
健康についての肥りや番組に関心がありますか	はい	5 (100.0%)	142 (88.2%)	0.67	7 (87.5%)	90 (78.9%)	0.34	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.36$ (n.s.)
	いいえ	0 (0.0%)	19 (11.8%)	n.s.	1 (12.5%)	24 (21.1%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.29$ (n.s.)
<b>社会的役割</b>								
友だちの家を訪ねることがありますか	はい	4 (80.0%)	132 (82.5%)	0.02	5 (62.5%)	65 (57.5%)	0.08	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.08$ (n.s.)
	いいえ	1 (20.0%)	28 (17.5%)	n.s.	3 (37.5%)	48 (42.5%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.02$ (n.s.)
家族や友だちの相談にのることができますか	はい	1 (20.0%)	133 (83.1%)	12.67	5 (62.5%)	89 (78.8%)	1.14	$\chi^2_{\text{Homog}} = 2.83$ (n.s.)
	いいえ	4 (80.0%)	27 (16.9%)	$P < 0.01$	3 (37.5%)	24 (21.2%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 6.95$ ( $P < 0.01$ )
病人を見舞うことができますか	はい	4 (80.0%)	156 (96.9%)	3.97	7 (87.5%)	78 (67.8%)	1.36	$\chi^2_{\text{Homog}} = 6.75$ ( $P < 0.01$ )
	いいえ	1 (20.0%)	5 (3.1%)	n.s.	1 (12.5%)	37 (32.2%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.01$ (n.s.)
若い人に自分から話しかけることができますか	はい	5 (100.0%)	139 (86.3%)	0.79	7 (87.5%)	90 (78.3%)	0.38	$\chi^2_{\text{Homog}} = 0.40$ (n.s.)
	いいえ	0 (0.0%)	22 (13.7%)	n.s.	1 (12.5%)	25 (21.7%)	n.s.	$\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.40$ (n.s.)

\* 単独以外世帯：夫婦のみの世帯、親と未婚の子のみの世帯、三世帯世帯、その他の世帯を合わせた世帯

\* 無記入、不明は喪中に計上していない

\* n.s. : not significant

社会的役割の「病人を見舞うことができますか」の項目で、各年齢区分における世帯間で有意差は認められなかった。前期高齢者では単独以外世帯に「はい」と回答した者の比率が高かったが、逆に、後期高齢者では単独世帯に「はい」と回答した者の比率が高く、年齢区分による交互作用が認められた [ $\chi^2_{\text{Homog}} = 6.75$  ( $P < 0.01$ ),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 0.01$  (n.s.)].

表 5-2 に女性の日常活動能力の各項目の年齢区分別、世帯別の分布を示した。

知的能動性の「新聞を読んでいますか」の項目において、前期高齢者、後期高齢者のいずれにおいても単独以外世帯の者は「はい」と回答した者の比率が有意に高く ( $P < 0.05$ ,  $P < 0.05$ )、年齢を

調整しても「はい」と回答した者の比率が単独以外世帯で高く、有意な関係が認められた。 [ $\chi^2_{\text{Homog}} = 0.68$  (n.s.),  $\chi^2_{\text{Assoc}} = 11.76$  ( $P < 0.01$ )].

#### IV 考 察

##### 1. 分析対象者の特徴

地域在住高齢者の単独世帯や夫婦のみの核家族世帯（老老世帯）の者は、日常生活をしていく上でもさまざまな支援を必要としていることが推察されることから、これら的高齢者の継続的な把握を行い、実態に即したソーシャルサポートやソーシャルネットワークの構築が必要であると考えらる。

配偶者有りについて単独以外世帯でみると、男

表 5-2 日常生活能力の分布 —女性—

	65-74 歳 (N = 213)			75 歳以上 (N = 205)			Mantel-Haenszel 法による検定
	単独世帯 (N = 15)	単独以外世帯 (N = 198)	$\chi^2$ P 値	単独世帯 (N = 45)	単独以外世帯 (N = 160)	$\chi^2$ P 値	
<b>手段的自立</b>							
バスや電車を使ってひとりで外出 できますか	はい	14 (93.3%)	174 (87.9%)	0.40	30 (66.7%)	95 (59.4%)	0.79 $\chi^2_{Homog} = 0.10$ (n.s.)
	いいえ	1 (6.7%)	24 (12.1%)	n.s.	15 (33.3%)	65 (40.6%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.81$ (n.s.)
日用品の買い物ができますか	はい	14 (93.3%)	190 (96.0%)	0.24	36 (80.0%)	126 (78.8%)	0.03 $\chi^2_{Homog} = 0.27$ (n.s.)
	いいえ	1 (6.7%)	8 (4.0%)	n.s.	9 (20.0%)	34 (21.3%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.03$ (n.s.)
自分で食事の用意ができますか	はい	15 (100.0%)	194 (98.0%)	0.31	40 (88.9%)	131 (81.9%)	1.25 $\chi^2_{Homog} = 0.18$ (n.s.)
	いいえ	0 (0.0%)	4 (2.0%)	n.s.	5 (11.1%)	29 (18.1%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 1.47$ (n.s.)
請求書の支払いができますか	はい	15 (100.0%)	192 (97.5%)	0.39	36 (81.8%)	130 (81.3%)	0.01 $\chi^2_{Homog} = 0.38$ (n.s.)
	いいえ	0 (0.0%)	5 (2.5%)	n.s.	8 (18.2%)	30 (18.8%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.00$ (n.s.)
銀行預金・郵便貯金の出し入れが自分 できますか	はい	15 (100.0%)	178 (90.4%)	1.59	33 (73.3%)	104 (65.8%)	0.90 $\chi^2_{Homog} = 1.11$ (n.s.)
	いいえ	0 (0.0%)	19 (9.6%)	n.s.	12 (26.7%)	54 (34.2%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 1.36$ (n.s.)
<b>知的能動性</b>							
年金などの書類がかけますか	はい	11 (73.3%)	161 (82.1%)	0.72	26 (57.8%)	82 (51.6%)	0.54 $\chi^2_{Homog} = 1.22$ (n.s.)
	いいえ	4 (26.7%)	35 (17.9%)	n.s.	19 (42.2%)	77 (48.4%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.02$ (n.s.)
新聞を読んでいますか	はい	7 (46.7%)	154 (78.2%)	7.57	18 (40.0%)	98 (61.6%)	6.69 $\chi^2_{Homog} = 0.68$ (n.s.)
	いいえ	8 (53.3%)	43 (21.8%)	P < 0.05	27 (60.0%)	61 (38.4%)	P < 0.05 $\chi^2_{Assoc} = 11.76$ (P < 0.01)
本や雑誌を読んでいますか	はい	9 (60.0%)	124 (62.6%)	0.04	19 (42.2%)	78 (48.8%)	0.60 $\chi^2_{Homog} = 0.06$ (n.s.)
	いいえ	6 (40.0%)	74 (37.4%)	n.s.	26 (57.8%)	82 (51.3%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.39$ (n.s.)
健康についての記事や番組に関心が ありますか	はい	14 (93.3%)	187 (94.4%)	0.03	34 (77.3%)	131 (81.9%)	0.47 $\chi^2_{Homog} = 0.01$ (n.s.)
	いいえ	1 (6.7%)	11 (5.6%)	n.s.	10 (22.7%)	29 (18.1%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.25$ (n.s.)
<b>社会的役割</b>							
友だちの家を訪ねることがあります か	はい	13 (86.7%)	170 (86.3%)	0.00	33 (73.3%)	118 (73.8%)	0.00 $\chi^2_{Homog} = 0.00$ (n.s.)
	いいえ	2 (13.3%)	27 (13.7%)	n.s.	12 (26.7%)	42 (26.3%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.02$ (n.s.)
家族や友だちの相談にのることが ありますか	はい	12 (80.0%)	180 (91.8%)	2.38	34 (75.6%)	124 (78.5%)	0.17 $\chi^2_{Homog} = 1.22$ (n.s.)
	いいえ	3 (20.0%)	16 (8.2%)	n.s.	11 (24.4%)	34 (21.5%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.66$ (n.s.)
病人を見舞うことができますか	はい	14 (93.3%)	188 (94.9%)	0.07	31 (70.5%)	126 (78.8%)	1.34 $\chi^2_{Homog} = 0.02$ (n.s.)
	いいえ	1 (6.7%)	10 (5.1%)	n.s.	13 (29.5%)	34 (21.3%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.98$ (n.s.)
若い人に自分から話しかけることが ありますか	はい	13 (86.7%)	185 (93.9%)	1.19	37 (84.1%)	136 (85.0%)	0.02 $\chi^2_{Homog} = 0.74$ (n.s.)
	いいえ	2 (13.3%)	12 (6.1%)	n.s.	7 (15.9%)	24 (15.0%)	n.s. $\chi^2_{Assoc} = 0.13$ (n.s.)

※ 単独以外世帯：夫婦のみの世帯、親と未婚の子のみの世帯、三世帯世帯、その他の世帯を合わせた世帯

※ 無記入、不明は表中に計上していない

※ n.s. : not significant

性では前期高齢者、後期高齢者とも90%以上であったが、女性では前期高齢者が74.6%、後期高齢者が45.9%であり、女性の配偶者有りの割合が低かった。女性の配偶者有りの割合が低かった要因は、男性の平均寿命が短いことや先の戦争により夫が出兵し戦死したことにより死別した女性が多かったこと、身体機能の衰えなどにより家族で支えることができなくなった男性(夫)は施設に入所することが多いなどが要因として考えられる。

単独世帯は他の世帯に比べて平均子数が少なく、子との距離においても他の世帯に比べて近くにいる子(「車で30分以内の距離」)も少なかったことから、これらの者は子との交流頻度が少なく、

日常生活で困った時の対応、心配事の相談相手がないこと、病気などの緊急時の対応などにおいても不安や心細さなどを抱えながら生活していると推察される。

友清ほか(1993)は、最寄の子供との別居距離と子供との対面周期については、距離が近いほど対面回数が多いという報告をしている。また、松本ほか(2001)は、高齢者の一人暮らしに至った背景は、配偶者との死別や離別、親・きょうだいとの死別や別居、子どもの就職・結婚等の同居家族の事情による要因、未婚による要因などをあげており、本調査では後期高齢者は、子どもと同居している者の割合が高くなっていたが、加齢に

伴って身体機能が衰えたことと、配偶者と死別したことにより一人で暮らすことが困難になったために子どもと同居するようになる高齢者が多く、一方、単独世帯では子の数が少なく、同居する子がないことから、一人暮らしを余儀なくしているとも考えられる。

単独世帯高齢者のうち特に子が近くにいない者は、子からの支援が得られにくいと推察される。古谷野ほか(1994)は、老年期の独居は急病や事故、災害時の対処が困難であったり、健康習慣を維持しにくい、犯罪の被害を受けやすいなど、特有の高い危険性をともなうと述べている。また、Iliffe et al.(1992)は、独居高齢者は現在生きている子の数やきょうだいの数が少なく、緊急時にコンタクトをとれる者がいないことや、夜間の援助の資源がない者が多く、より手助けの必要性が高いと述べている。

これらのことから単独世帯高齢者であることが直ちに要支援・要介護高齢者であるということではないが、単独世帯高齢者に対して、子の有無、子との関わり、子や親類、近隣との交流状況など高齢者本人や近隣者、民生委員等からの情報収集により状況把握およびアセスメントを行い、特に子から支援が得られにくい単独世帯高齢者に対して、予防的なサービス介入を図ることが求められる。

## 2. 外出状況

外出状況については男性において年齢による相互作用が認められ、「よく外出する/たまに外出する」の比率は前期高齢者の単独以外世帯に有意に高く、逆に、後期高齢者の単独世帯の比率が有意に高かったことから、前期高齢者の単独世帯の者は外出頻度が低いと推察される。

男性の後期高齢者の単独世帯は外出する者が多く、孤独感・不満足感を感じるものが多かったが、身体機能の衰えなどにより男性の後期高齢者の者は施設入所をしており、地域には比較的健康な者が多く、ADLや日常活動能力が高く、孤独感や不満足感をより感じることから独りで家にいるより

も外出して人との交流や活動を行う者が多いと推察される。

ところが、後期高齢者よりもADLや日常生活能力の高い前期高齢者の単独世帯に外出するのが少ない傾向がみられたのは、仕事などから退き社会的役割の喪失感が大きいなどのために、閉じこもりがちになる可能性が示唆される。従って、地域との交わり、趣味や習い事など自己実現に向けた活動の支援を行うことも必要になる。

## 3. 主観的幸福感、ADL、日常活動能力

前田ほか(1979)や山下ほか(1992)は、単独世帯高齢者のモラルは低いと報告している。男性の単独世帯は、前期高齢者、後期高齢者とも主観的幸福感は有意に低かった。男性の単独世帯後期高齢者は心理的動揺「最近になって小さなことを気にするようになった」「不安に思うことがたくさんある」、孤独感・不満足感「さみしいと感じることがある」「家族、親戚、友人との行き来に満足していない」「今の生活に満足していない」と回答した者の割合が有意に高く、同居する家族がないことによる不安や孤独感、不満足感があると考えられる。

女性の単独世帯は心理的動揺「心配事があるとすぐおろおろしない」と回答した者が有意に高かったことから、これらの者は心配事があっても日頃の生活から自分自身で解決しなければならぬと気丈に考える者が多いと推察される。また、自分の老いについての態度「年をとって前よりも役立たなくなった」に相互作用が認められ、後期高齢者で「思う」と感じる者が有意に高かったことから、老化に伴う身体的機能の低下によりそのように感じる者が多いと考えられる。さらに、「若い時に比べて今の方が幸せと思う」の項目で相互作用が認められ、前期高齢者が有意に高かったことは、若い頃は経済的なことや子育てなどによる生活苦が大きく、子育てなどを終えて趣味や隣近所や友人との交流が行える今の方がより幸せと感じる者が多いと推察される。

岸ほか(1993)は、「寂しさ」は他の世帯に比べ

て一人暮らしの男女で高いことを報告している。本研究においても男性と女性の単独世帯の後期高齢者は、孤独感・不満足感の項目で、否定的回答をした者の割合が有意に高かったことから、これらの者は同居者がいないため、より孤独感を感じやすく寂しさが強くなると考えられる。また、杉澤(1993b)は、独居群では他者との接触が、同居者の存在の代替として保健行動面での問題の解消に有効であること示唆している。

従って単独世帯高齢者に対して、行政と地域が連携を図り、公民館活動や地域の活動への参加を促す、食事会の開催、生きがいを持つことができるような場や機会の提供、地域のボランティアや隣人などによる定期的な訪問、友人や近隣などの他者との交流を図ることによって保健行動を促すなど、精神・心理的援助を含むソーシャルサポート、ソーシャルネットワークの充実を図ることが求められる。

日常生活能力の得点については、男女とも世帯間に有意差が認められなかったが、下位尺度の「社会的役割」において男性前期高齢者で世帯間に有意差が認められ、単独世帯が有意に低かったが、それを項目別にみると、社会的役割「家族や友達との相談にのることがない」と回答した者が有意に高かった。しかし、女性においては「社会的役割」の下位尺度の各項目においては有意差は認められなかった。

男性の単独世帯前期高齢者は、社会参加や社会的役割が少なくなったという意識が強いと推察された。また、男性の前期高齢者は、定年退職等により仕事等の社会的役割から離れ、高齢者の範疇に入れられることから、一線を退いたという意識が高い者とそうでない者の差が大きいと考えられる。古谷野ほか(1987)の調査によると、「社会的役割」では、男の得点の方が低かったと報告しており、今回の調査も同様の結果と考えられる。

岸ほか(1999)は、男性では社会的支援およびネットワークと早期死亡との関連性で、「情緒的サポートが少ないこと」、「老人会などのグループ所属がないかあるいは消極的だったこと」、「友人が

なかったこと」が有意に早期死亡と関連していると報告していることから、著者は社会的役割が少ないと早期死亡に繋がると考える。従って早期死亡の予防的な意味からも社会参加を促し、公的サービスとともに家族や近隣などの社会的支援および個人のネットワークを見据えた地域ケア体制を構築することが重要であると考えられる。

杉澤ほか(1994)、地域集団への統合の程度が、日常生活動作能力の障害の出現および消失に対して有意な効果が男性についてのみみられ、地域集団への統合や余暇活動への参加が生命予後に大きな効果をもち、その効果は男性の方が女性よりも強いと報告している。特に、単独世帯の男性前期高齢者は、社会的役割が減ることによって身体的、心理的に強く影響すると考えられることから、これらの者に対して社会的役割が維持できるような関わりや、サポートがより重要となる。

杉澤ほか(1994)は、日常生活動作能力の自立は、高齢者個人が社会との接点を持ち、生きがいのある生活を送るうえにおいて重要な要件であると報告している。生きがいのある生活を送るためには、現在の活動能力を維持させ低下させないために、ゲートボールなどの活動への自らの参加、予防的な支援、環境の整備など多面的な対策を行うことが重要である。

日常生活を営む上で日用品の買い物をする、食事の用意をする、お金の管理、外出をするなどの手段的日常生活動作は自分で行えることが望ましいが、これらのことが独力でできない、あるいは同居人がいない単独世帯高齢者は、他者からの支援がより必要と考えられる。本研究における単独世帯では、これら手段的日常生活動作ができない者がいたことから、家族からの援助が得にくいまたは得られない者に対しては、行政や地域が医療機関等への送迎、外出支援サービス、配食サービス、軽度生活援助サービスなどの必要性を把握し、支援を行う必要がある。

古谷野ほか(1994)は、サービスの受け手(対象者)の把握がサービス提供の前提となり、特に予防的サービスの場合には、対象者から利用申請

を期待することができないので利用申請に頼らない対象者把握が不可欠であると述べている。

本研究の女性において、前期高齢者および後期高齢者の単独世帯は「新聞を読んでいる」者の割合が有意に低く、単独世帯の半数が新聞を読んでいると回答していた。古谷野ほか(1993)は、新聞を読まない者が女性に多いことは社会・文化的に規定された性別役割分業のもとでの生活様式の蓄積が影響を及ぼしていると報告している。著者らは、高齢者は加齢に伴う視力の衰えなどで新聞を読まない者が多く、テレビやラジオを情報源としている者も多いと推察されることから、単独世帯の高齢者に対する行政サービスに関する情報の伝達方法として新聞以外のマスメディアや訪問による広報を行うなどの工夫が必要であると考えられる。

#### 4. 研究の限界

今回の調査対象者は、一地域に限られた横断的な研究であり、認知症等、質問内容への応答が調査不能の者は調査対象者から除外されていることと、単独世帯の対象者数が少ないことによる偏りなどを考慮した評価をする必要がある。

### V 結 論

1) 単独世帯高齢者に対して、継続的な把握を行い実態に即したソーシャルサポートやソーシャルネットワークの構築および予防的なサービス介入をはかることが求められる。

2) 単独世帯高齢者に対して、閉じこもりの予防の視点からも、地域との交わり、趣味や習い事など自己実現に向けた活動の支援を行うための外出を奨励することが有効であることが示唆された。

3) 男性の単独世帯高齢者の主観的幸福感には有意に低く、特に孤独感・不満足感を抱えている者に対して、生きがいづくりなどの支援が重要である。

4) 男性の前期高齢者の単独世帯の者に対して社会的役割が維持できるような関わりや、サポートが必要である。

### 謝辞

本研究に多大なご協力を賜りました沖縄県恩納村役場保健福祉課職員、民生委員、ボランティア、および恩納村の高齢者の方々とそのご家族の皆様にご心よりお礼申し上げます。

本研究の一部は、平成12年度日本学術振興会奨励研究(A)により実施された。第11回日本疫学会学術総会(2001.1,つくば)において本研究の一部は発表された。

### 文 献

- 赤嶺伊都子, 新城正紀, 小川 守(2000): 介護保険制度の公的サービスおよびソーシャルサポート, 民族衛生, 66, 102-103
- 本田亜起子, 斉藤恵美子, 金川克子ほか(2002): 一人暮らし高齢者の自立度とそれに関連する要因の検討, 日本公衆衛生雑誌, 49(8), 795-801
- Iliffe S, Tai SS, Haines A et al. (1992): Are elderly people living alone an at risk group?, British medical journal, 305, 1001-1004
- 岸 玲子, 江口照子, 笹谷春美ほか(1993): 旧産炭地・夕張市における69・70歳老人の健康状態-高齢者のためのソーシャル・サポートとネットワーク構築のための基礎調査, 北海道公衆衛生学雑誌, 7, 203-210
- 岸 玲子, 築島恵理(1999): 農村における高齢者の健康状態と社会的支援およびネットワークの現状と保健福祉の課題, 日農医誌, 47(6), 819-827
- 厚生統計協会(2001): 厚生指標臨時増刊 国民衛生の動向, 48(9), 40-41
- 厚生省(2000): 平成12年度版厚生白書, 19, ぎょうせい(東京)
- 古谷野亘(1981): 生きがいの測定-改訂PGCモラル・スケールの分析, 老年社会科学, 3, 83-95
- 古谷野亘, 柴田 博, 中里克治ほか(1987): 地域老人における活動能力の測定-老研式活動能力指標の開発-1, 日本公衆衛生雑誌, 34(3), 109-114
- 古谷野亘, 橋本勉生, 府川哲夫ほか(1993): 地域老人の生活機能-老研式活動能力指標による測定値の分布-1, 日本公衆衛生雑誌, 40(6), 468-474
- 古谷野亘, 岡村清子, 横山博子ほか(1994): 住民基本台帳による独居老人の把握-同居家族のいる独居老人-の割合-1, 厚生指標, 41(4), 15-19
- Lawton MP(1972): Assessing the competence of older people. In Research planning and action for the elderly; The power and potential of social science, edited by Donald P. Kent, Robert Kastenbaum, and Sylvia Sherwood, 122-143, Behavioral Publications,



- (New York)
- Lawton MP(1975): The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A Revision, *Journal of Gerontology*, 30(1), 85-89
- 前田大作, 浅野 仁, 谷口和江(1979): 老人の主観的幸福感の研究, *社会老年学*, 11, 15-31
- 前田大作, 野口裕二, 玉野和志ほか(1989): 高齢者の主観的幸福感の構造と要因, *社会老年学*, 30, 3-16
- 松本清子, 東條光雅 (2001): 一人暮らし高齢者へのソーシャルサポートと精神的健康の関連性, *日本保健福祉学会誌*, 7, 81-89
- Mahoney FI and Barthel DW (1965): Functional evaluation: The Barthel Index, *Maryland State Med J*, 14, 61-65
- 恩納村 (2000): 健康文化と快適な暮らしのまち創造プラン報告書
- 恩納村 (2000): 青と緑の豊かな活力ある村 2000 年村勢要覧
- 恩納村 (2000): 恩納村高齢者保健福祉計画 (介護保険事業計画)
- 正門由久, 永田雅章, 野田幸男ほか(1989): 脳血管障害のリハビリテーションにおける ADL 評価, *総合リハ*, 17(9), 689-694
- 杉澤秀博 (1993a): 高齢者における主観的幸福感および受療に対する社会的支援の効果—日常生活動作能力の相違による比較—, *日本公衆衛生雑誌*, 40(3), 171-180
- 杉澤秀博 (1993b): 高齢者における保健行動の居住形態による差異, *老年社会科学*, 15(1), 58-67
- 杉澤秀博, 中谷陽明, 前田大作ほか(1994): 高齢者における社会的統合と日常生活動作能力の予後との関係, *日本公衆衛生雑誌*, 41(10), 975-986
- 友清貴和, 佐藤洋一(1993): 鹿児島市における独居高齢者の生活実態について—高齢者が自立できる社会形成に関する研究—, *鹿児島大学工学部研究報告*, 35, 81-88
- 山下一也, 小林祥泰, 恒松徳五郎(1992): 老年期独居生活の抑うつ症状と主観的幸福感について—島根県隠岐島の調査から—, *日本老年医学会雑誌*, 29(3), 179-184
- (受稿 2005.11.15; 受理 2006.8.10)
-